

美術の窓(29)

古代ギリシアの壺絵展を終えて

大和文華館館長 吉川逸治

今秋は、古代ギリシアの壺絵という題で特別展を催すことに致しました。日本にあるギリシア古代壺と申しますと、橋本コレクションの外はあまり数多く知られず、展示が可能かと心配致しましたが、この方面の研究を戦前から引続いてなさって居られる村田数之亮先生の御教示をうけ、また若い世代ではヴィーン大学でギリシア壺絵を研究して、ドクトルの学位をとられた水田徹教授に助けられ、本館学芸部次長吉田宏志君はじめ学芸部諸君総動員で、ギリシア壺絵の所蔵家方を尋ねて、皆様の御厚意により、七十余点の古壺とそれに関係あるギリシア古美術工芸品を出品させていただきました。

これほど新鮮に、爽快、優美な古陶の彩画を一堂に集めて、展覧致すことができますのは、初めてのことで存じ、御協力下さいました多数の所蔵家の方々に深く感謝の意を表する次第でございます。

はじめは、どんな民族の美術でも素樸なものであります。紀元前8、9世紀の幾何学式模様の壺は、後代のギリシア壺絵の優美な、或は厳正なデッサンからは考えられない程、簡潔、素樸な描線であり、すでに剛直な線で、独特のギリシア雷文を連ねて、アッチカ地方(アテネを中心とする)の赤膚の大壺をぎっしり飾ります。どんな美術も、最初は生命の脈動を伝える文様や模様から始まり、そこに、現実の人間やさまざまな対象を文様に和合するように記し、

文字の如く埋め込みます。

次いで、やがて彼等が陸に海に危険を冒して植民地を据え、オリエント諸国との交易で豊かになりますと、獅子などの猛獣やいろいろの花形だとかの新しい諸国の文様で飾られ、壺を全く別ののびやかな姿に致しますが、間もなく紀元前7、6世紀ごろからアテネなどギリシア本土が中心となって、黒絵式壺絵が始まります。その特徴は人間の像が赤地の膚に黒々と艶をもって描き出され、本当にギリシアらしい人物が時に勇ましく、時に優美に登場して参ります。内容は主として大小さまざまな神話イリヤッドやオディッセイアなど英雄譚から採り、人間が主人公で、猛獣、怪物、大蛇などを打倒す英雄の場面。それをかこんで、昔からのギリシア雷文やエジプトから学んだバピルスや蓮などの模様を整頓された枠飾りとなって、美しく整形された壺や杯を規則正しく飾ります。

逞しい男性、美しい女性ら、数少ない人物からなる場面に、傍から同じように人間の姿で、しかし、より厳めしい誇らかな趣きで神々が、勇気ある人間たちの努力を応援し、あるいは親兄弟のように彼等の世話役として立ち添います。ギリシアの人間主義で、神々も人間の如く考へ、欲し、行動しますし、人間は神々の御意に適ふように振舞います。画面は自から厳肅となり、気品高い優美さをもちます。紀元前6世紀末の名画家エク

セキアスの作品は、当時の壁画、板画を知ることの出来ない私達に、アルカイック時代円熟期のギリシア絵画の高尚な趣きを教えてくれます。

この画家の出現した時代、紀元前6世紀末、5世紀初頭から間もなくアテネの陶工の工房から、人物を黒で囲んで、地肌の赤を残して、ここに細筆で人体や服飾、武器の細部を記す赤絵式が現れて参ります。アルカイックの彫像、画像の特徴として言われる「正面性の規律」の枠から脱却して、絵画の方が彫刻よりも一歩先に進んで、写実主義をもにし、それから古典主義へと向かいます。神々も人間のように描かれ、人間も従って品格をもって美しくなります。

しかし、紀元前5世紀も進んで、大画家ポリグノトス、名画家パナインなどが現れますと、壺画芸術はこれら画家たちの描く壁画や板画の進んだ技法を十分に表すことは出来ず、一歩ずつ遅れて工芸的作品に近づきます。壺絵の最高時期は過ぎますが、この時代、紀元前5世紀、4世紀は数々の赤絵壺がギリシア絵画の盛んな部門として、まだしばらく私どもを楽しませてくれます。

ギリシアの絵画は、陰影法を創出して、立体感を表現し、遠近感を提示することから、的確な遠近図法まで考案しました。色彩も初めから「古典の四色」と言われる、白、黒、赤、黄が尊重され、黄を主調とし明暗を主とする地味な調



アキレスとアイアス(部分) エクセキアス

子が尊重されますが、やがて緑、青が加わり、寒色、暖色の使い分けから、空気遠近法の妙技をものにし、最後には点描法による光の絵画にまで到達して、近世西欧絵画の技法を殆んど開拓してしまいました。

アレクサンドル大王が東方遠征にむかう紀元前4世紀後半には絵画は、神話画、演劇画、戦争画、肖像画、静物画、風景画から黄泉図に魂の姿まで、すべての分野を開拓して行きました。これらの古典絵画が同じく紀元前5、4世紀に古典期に到達した古代ギリシア彫刻と共に、外観の華美もさることながら、もっと深い人々の靈魂の意識を問題とする時代、紀元前後10世紀の課題であります。世界宗教の時代の造形的役割を荷うこととなるのであります。

ギリシア、ローマの古典文化はシルクロードの運んできた最も大切なものであります。この「古典文化」の核心は、靈魂不滅の意識であります。これによって、それまでの民族宗教行事から世界宗教の時代へ向上することとなります。仏教は、古典古代の彫刻、絵画を採用して精神表現の基準としますし、少し遅れてキリスト教も、古典文化の絵画、装飾を精神化して採用し、最後にイスラム教は古典の彫像、画像を拒否し、純粹に宇宙像として建築と幾何学模様を採用して、最も明確に「古典主義」の人間主義を拒絶し、純粹に靈魂の本源に拠ろうと致します。

季刊 美のたより No.85

昭和63年11月11日

発行 大和文華館